



繪本孝感傳

二

^ 13
3581
2



門 13
號 3581
卷 2



增々孝感傳卷之二

目錄

春城小次郎生長の法

春城小次郎傳

其二 其三

義と成て小次郎家と稱する圖

男児生ると報する法

春城久才對面法

相原殿と小次郎旅の法

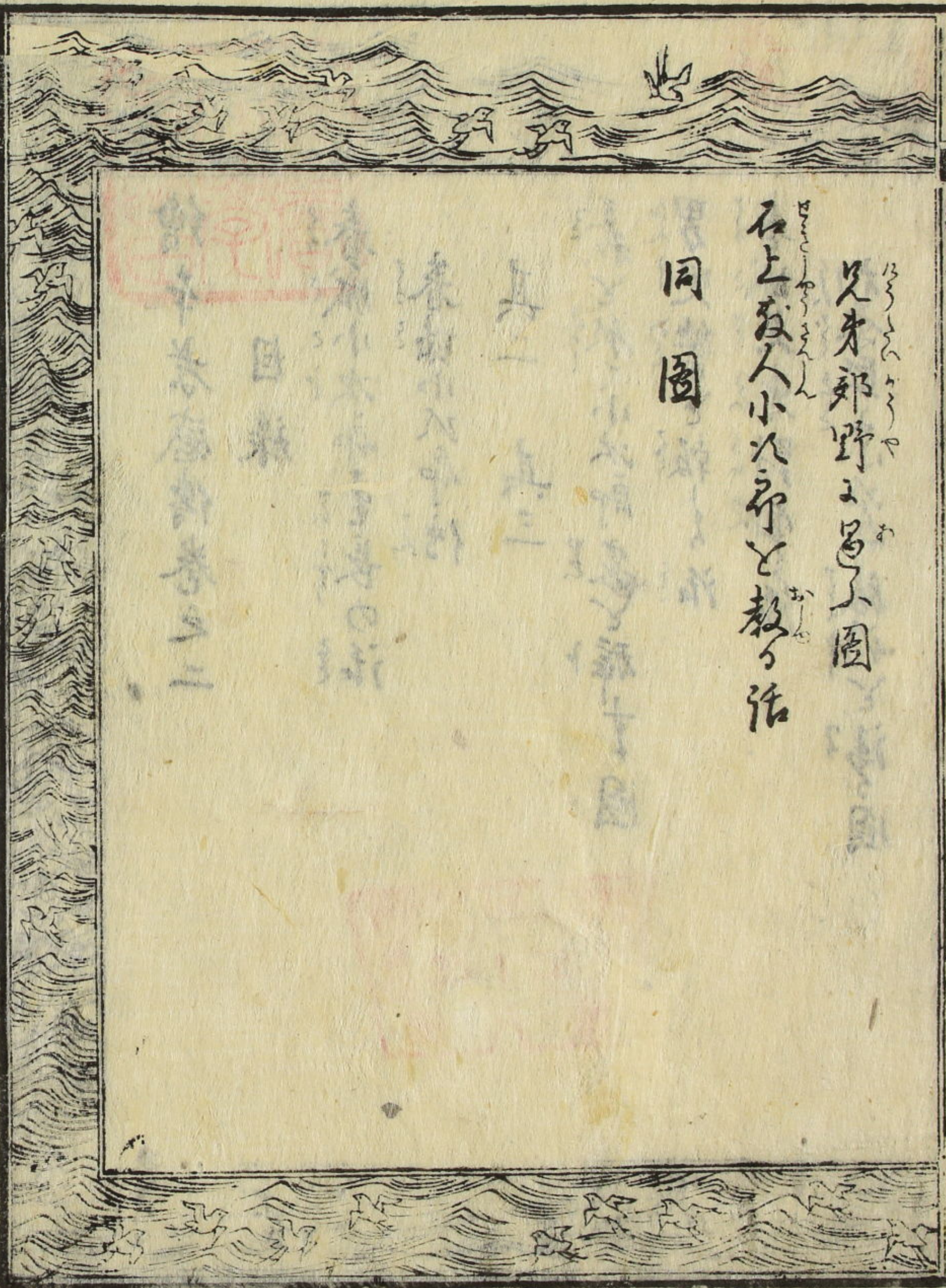
會々傳卷之二

早稲田大學圖書館
昭和 35. 1. 22
藏書

兄弟野子圖

石上の人小次郎と教の法

同圖



繪本老風傳卷之二

春情小次郎生長の経

筆軌に安んじて其樂を改め次旬日九食ひて具又も遊芸がおもひ
こい卑爾たる智者の体と具またまむ與ある事能へ次是と侍
甲しく老賢智とくども式を孤島の窮を怨む又老白鳥の榮
と羨むは人情の棄ぐくこもるり況や才藝を膝で筆世よせる
その童意くとして陋巷と甘んや却親春情典胎が次男小次
郎の縁故よりく小幡孫次郎が義子とるりしがたある
春の宿園よりや小幡更帰と慕ふ事所生の父母は晴里深更
婦も亦お生の子に際しく慕愛を尽し養育く母智又及ん
で讀書字子の業を習せらるるは性貨頓悟して初を初と遊戯る



春城小次郎
傳



村老只言謂馬武劍の傲とそく遊の耐まじりて若く畢信態と
 せざりけり是が夫婦もその族性の限り難きと感じ終末最教有
 と益意愛深し小次郎八歳の以松女不斗塔又捨く一女子を生
 び小幡大は收ひ奉奉以血嗣を帯し又其のるく今八思と絶け
 又海巫女見と後し小次郎と娶せり子孫を承せりとて先
 祖の眞血あるとし喜言限りたりし又一歳と隔く又一男子
 と産ぬあるらん又八思の愛又漸く小次郎の志も地へさし小幡
 夫婦え来りて人情はして若く若く若く小次郎を嫁せり
 て而生の男児は地姓を嗣えんと難めん斗を定具情半兵の原
 為るく二人の児女を齊く育養ひぬるるよけ女児僅く乳養と難
 父母の膝と受るより偏し小次郎又慕ひ懐き終日の游戲より

如何と賺せども止べりし経小次郎も村は友愛の情深くゆ
 指差とるまき物々父母は代りて彼女児と芳里父の使令ありて
 他は種おと老親もと携或は脊又肩く体ひ一く小幡夫婦も
 子婦の睦測と今より乃るん地して心裏密に恨ひたり小次郎十
 と歳の時父が急ぎの使令と交隣に来り家より後書を携りて
 急ぎ油まきおろし活るる野川の境又家よりト年齢自難士三人
 来るひ狗と畜て番所し又許孫人と言ふて走くを後と通り
 色人とせし又固執さ途るま思ひ一人の猶も仍る難士大は怒り
 遠へ不而る日聖事許しと奉と揚と難かるよそ小次郎早くも
 先却砂よと踏て人燥めく急不不終と伴後偏は許させり

長しく詫々色ぞ二人齋へ居たまふなりさきへ尚なほ不な官くわん裡りのもの
 るると土民の小婢こひめの分ぶんにして海うみをもまた越こへり利り勝しょう物ぶつとも去さりて又また意いをなす
 許ゆると斗たたかひてるゆへさやど身み息いきの止とどめる程ほど可か責せて後のち許ゆるく好よむ
 許ゆるてまんと言いふより敏みく理こと不ふそう又また誓ちかむとも相あいひて眼顔がんの分ぶんらも
 るくあらはせしと誓居いて小治ぢくも今いまの腹はよく入りの恩おん憤ふん然ぜんとして
 考あらはせし汝なんぢ為なすを刀やいばと佩をひく武士ぶしといふ暴逆ぼうぎやくといふとこそをなす
 祿ろく若わ夷いの武士ぶしのたと知る遊真まのお又また性じやう量りやうの妨がらとまいり永
 農い民みんのままも汝なんぢ為なすがといふ不法ふぽうのまのよおち擲ちやくせしてやらす事
 見みとらしと人ひととやと一人ひとりの肘と捨て俯は実例じつれいと言ふ二人にの權骨
 と強あらはせし將まさには皆みな案あん又また相あいひて作天てんせしといふも故ゆゑといふに
 意いと見せ次已いま向せま二は長ながしと柄つらと捨て長しかく云ふ小治

崩おろろの里正せい本ほん藤とうより走りゆく二人にと相殺あつた彼かの小せう童どうが先刻さきうより未
 終はつたの所に汝の程に抱はれて去るが奴やつが未大だい純じゆん處ところまで着て着て上
 下したの分も毎日まいにち屢しばしば々々の事と仕出しし私たも始はりと奉ほう成じやうはれて者換かひの
 重おもく汝身み又また以もて考へらるの空うつけ葉はのり奉ほう又また汝なんぢ心こころと思はれる後の汝は
 口くち頼たのみと捧たましりそのよい奴小せう童どうが汝身みと構へて私わがは先にせします何
 事ことも許さし下くださしといふ只當ただ又また常とこ々々に人を後に私とほる事はいふ
 はして小治ぢくと碯いしと族視しゆ件けん絶たつ奴が未大だい純じゆん處ところに住ますに住ますにけいなさす
 許ゆるさす也いふ未大だい純じゆん處ところと再以また頭あたまと叩き一齊いつじに吐き笑ふ小治ぢくと碯
 又またも對人たいじんとすると里うち正せい本ほん藤とうは汝身みと構へて私わがは先にせします何
 心こころと用ひよい汝身みと構へて私わがは先にせします何
 せし得えぬが身みの體のままに親おもいふも始はりと奉ほう成じやうはれて後の汝は
 せし得えぬが身みの體のままに親おもいふも始はりと奉ほう成じやうはれて後の汝は



遂にのたまふを知らざるに宣氣も神のちるそのと眼をのりて
あつせき小次郎早くも其志を悟りて身の時候と父母の歎は
易て憤り家よりゆりたる

義と敬て小次郎家と稱する語

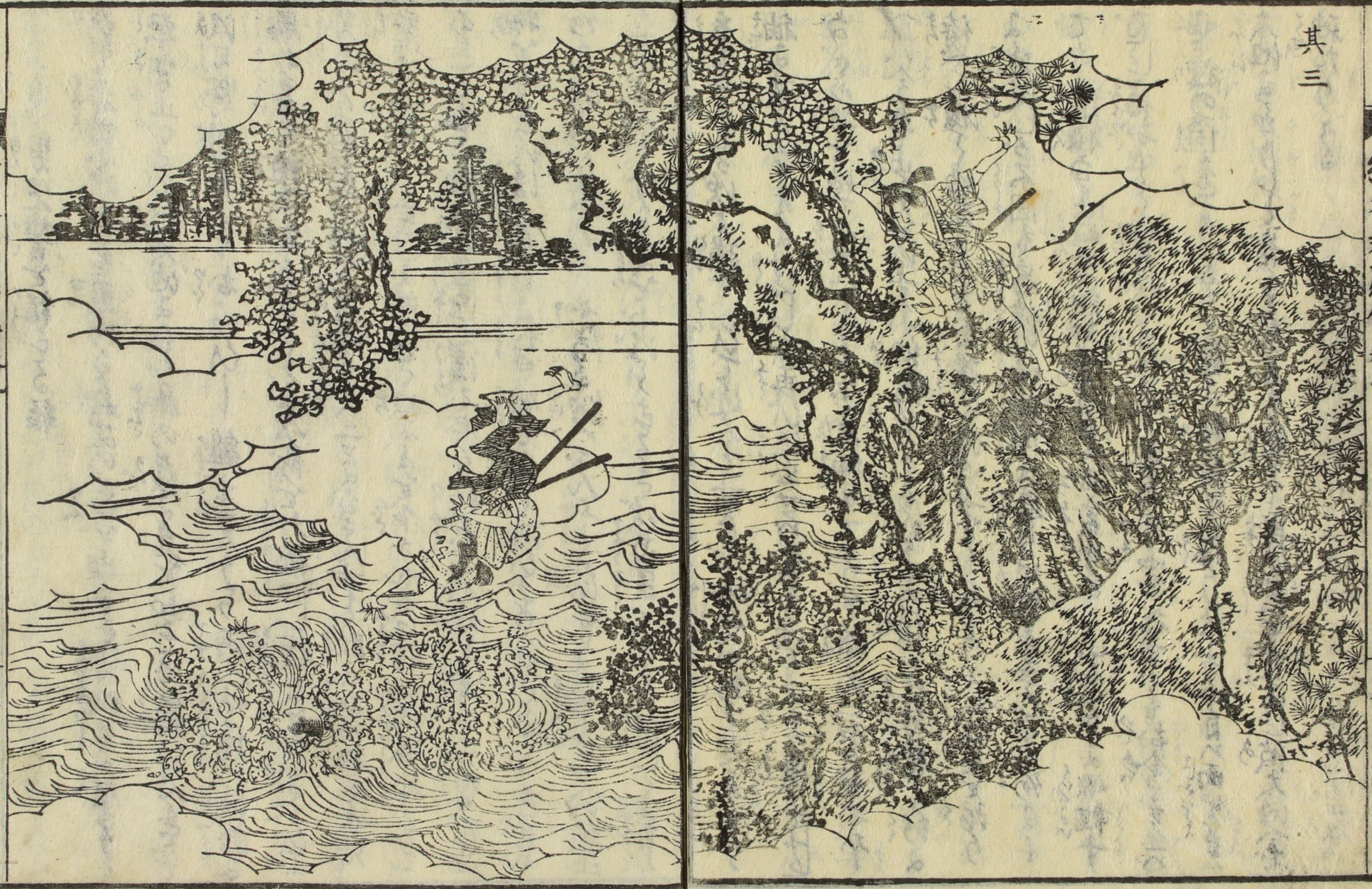
斯て小次郎き里山が志を測り其場へ故よりして身の時候と雖
憤氣尚胸間へ逼りて公平定まるるに家農は家より身まてるるが
如ゆるる恥辱を受ても恨むるをよあつれとて平石を吹する
武士の子何方ははるも他人の下はひきまらば故に僅小房使志
軍の飽まで恥辱を受けてまひりと言ををどるるに能く編みぬか
果慢と改よさせ却て怒り畏きて生涯を送らんハ男回るるその
の悔べし能く改よせむと改父母生育の恩よりするに養海

も深きまは家と継承するその志は放りて他何等の親を嘗ても
如ゆるせん親父母の老孝と授承するまらば幸に血属の妹
何れを棄てさせ未けし知と隣人共固心は於て安らげ彼を忍び是
と謀まば不詮け家と辞し困りゆて取生の父母は恥を苦く
士官の志と違し後今日の罪を免生育の恩を報せん此志操
恩義共々全くとあるべしと堅く心を度し同と何てけるは情
んとすまじども親父母の休意るるに偶とて心を付ても膝下は春
育せしはし慈愛の情の忍びからるるに今も又よまきまらるるの悲しく
其るをよりし小次郎び免や何ん角やあんと固執して強り
救目然送りたるが再び思ひ思ひるるに家妻の親子るるに別
是は除むの悲と尚彩のじし況や家彩も自ら止り示後弟るる

その家と離れて他へ移らん時骨肉の真の情は何ありて是を以て
 其の心は闇彼の家と終すこと孝の友愛の幸あるは是れ也
 母は昔奉まつらんと思ふに其の情も能く是れを以て
 るく家を出るよまると一日又孫次郎を外に出しと伺ひて妻
 城がまゝとて言まの短刀を袂に包て携持又の信をまゝ一幹事
 ありて今頃の秋まで奉侍と何事なく母は昔々出た顔と女御
 も見渡共の種んとは慕ふ小次郎故と之を抱き今頃まで其の
 程遠くまゝを侍ひしと先を告げよまるとはとぬん種々婢女を送り
 軒下へとまて大袂の側なる林間へ侍ひの遊戯を以て好く女
 児の言を教めたるう仮初侍りて家を出し身今よまのぬれが不
 慮して呼ばれんは必是之大事を懐きその美細は抱らんやまらうり

まゝのよまらうと隙を伺ひて遂んとすまじと女御の形も月るる
 袖はすがりてたははれしと再びは出せんとすまじと女御の形も月るる
 るがめおとめて退んとすまじと女御の形も月るる
 一は今を止むとすす小細とて女御の本の根は結対結く終は
 侍りし種々ゆするそと云捨くは叫ぶとも耳なり 夏は是を限り
 又述はか不圖も富樫の情胸間は通りけは終る人るは何よ
 ても遺恨るまの誓約と誓めを必是今日あけまはり又離れす
 池しるがくは昔懐とあせんと東西南北を捜せどもあきまは
 言程の門を閉りて盗り初静と探りまき今日西里ま
 大池はまじしと告るそのあり固く再び是と宣はし彼大池を
 馳たりたる

其三



會木亭感傳三

繪本老屋傳三

男八人 誓と報とる結

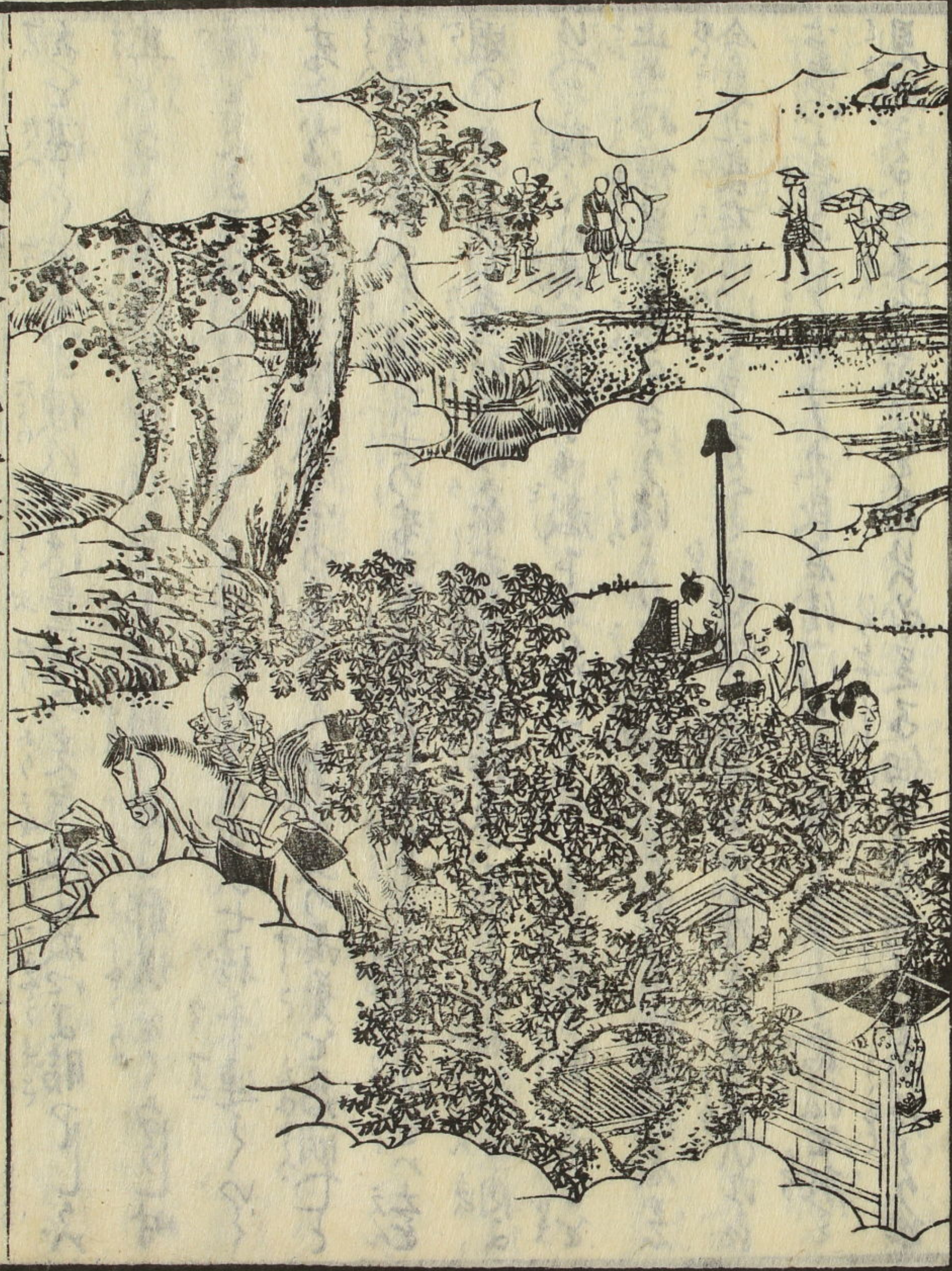
移て春城小次郎を思ひぬる義父の家と出るを皆奴等が成るり
 無事止むべく彼大池より柳の蔭より身を隠すをめ頼川入るを
 日野川よりおのひー 雜士をうち 兩人は傍の池邊
 瞬ち變て釣と畜するがう小次郎と打擡せ「慢云を打ちて
 笑居りりー小次郎益勝りま二さるさんすと 既よ力の柄はま成
 足しがやく 奮動は勝りぬ小まと下さん老に勝」能謀斗こそ
 あまてはな 黙致勝世して後不あり釣糸は心魂を奪はま居の
 物とも云は後より力又任せ確と突く之ひがもるささるるま
 何ふぬきたぬえそあるゆへさんぶと居るは驚き二人の雜士
 を上へんとするまよと小次郎はささるさばあまとくと勝く者

是る池も人共倒れは入る小次郎より 親見なく何れは
 伏るるふと拍子とる勢は河くとお幾ひ再び足と速り今頃の
 驛も通りる一連は拍原まで走りしる早くも夕陽山の端を越ひ
 野寺の鐘聲晚風よく若来る小次郎も末伶俐なりといふ大坐
 へらく家を出しするまに囊中半積の蓄人もなく何れせんといふ
 痛し不圓側の鉄金と刃をへ煙うぬ武士の想」とささく弓論と
 簷下は傍系其他具足置換拍音銃の桶等の物所後中て並
 並たり形なりてこそ世はゆる難もあはし」と坐は腰しく三寄
 て伺ひしは酒をよ流る舞音は素流言状士系と下せり小次郎
 見るより天の与とと駈合りの入中にも年をさ徒士の体は座机の
 茶もよとつらん私茶の豫易勝山以内のまのよてはが頼家の老小

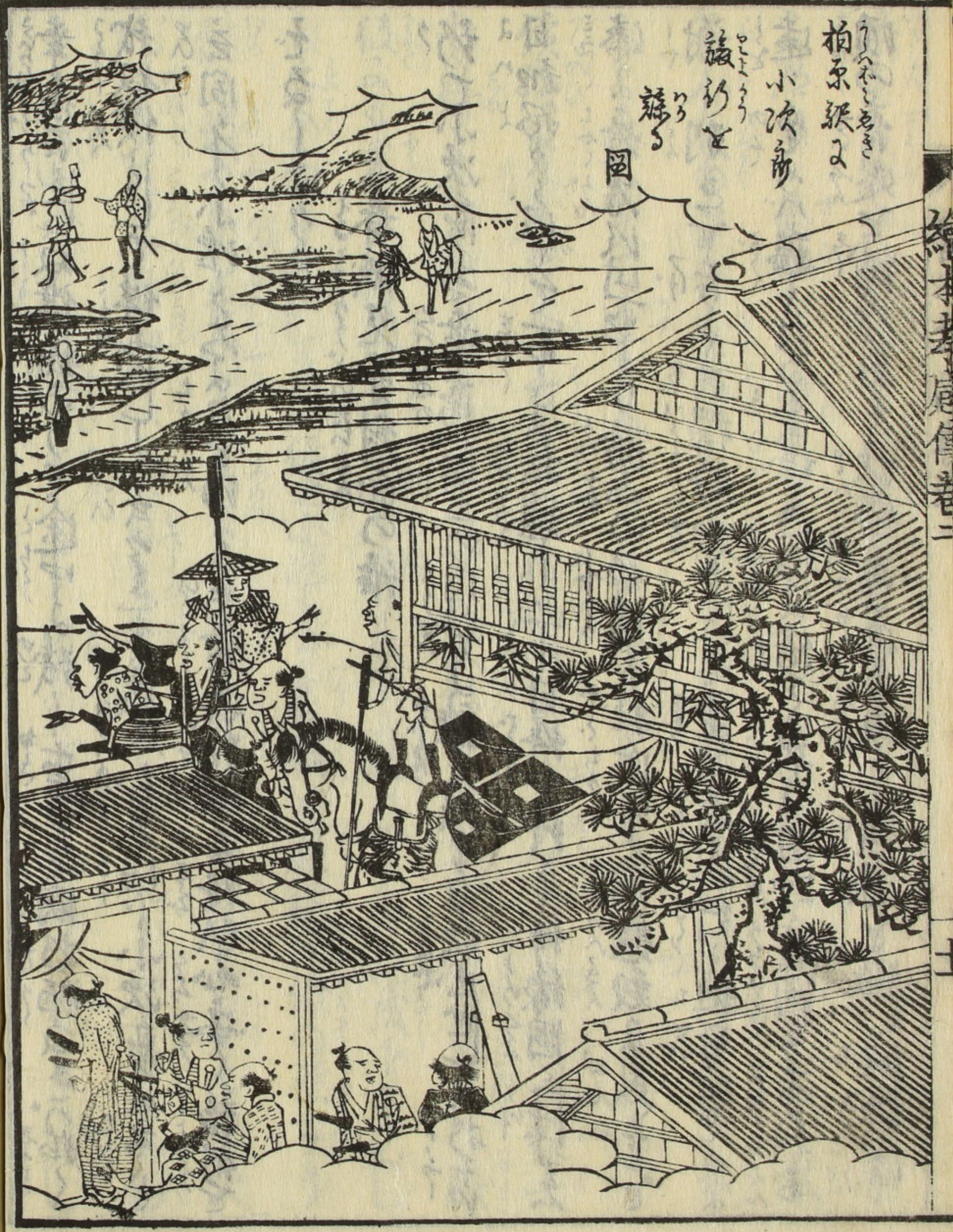
誘き家次と糸指は半途に於て凶悪徒と賺まき近れんとす
 乃た是れ非なく渠等又逐ひて彼方の沢まで来りし而も渠
 等心算の事や出たりん俄に本流と海間道と探険を伺ひ奉
 るとけりてはまた近き縁とて前迄是東なく跡の首を求む人ぞ
 債積るるまき金方とて「お掲けりる事乃其は素島津家士
 少時とて下と刃なり素島と破次形よ何事と辨と高強の賊
 復も充らまき河間まで行まき下されは中と歩成下りて
 と素島と又述し「おけ従士小次郎が容貌と懸視同僚の従士
 討ひ彼が素島の苦状よも偽あり又其件素島の子弟とも刃
 けけ福の若心甚極むしけ自ら人よ若くは素島とて人若くは
 そと「福」一人の従士をまきおけけ木の子も人の跡と行るも及
 幸素島に「奴僕病ありて途中に残し重りと綱お掲るまは始
 我奴僕として伴下しと云々まき衆人むと目下小次郎又云と
 云同子小次郎と云力とゆるく只管其指揮又佐ひ心々旅行を
 せむしよるる

春城兄弟対面の話

巧て小次郎と素島家士の月野又難大阪より取出世し又おそ
 日和好くはれそ重く又懸懸し「下日許と行く伴縁固三津と
 漆は着着はけしやうり勝山の郡城も程に」と同態又見よと
 謝し別と若く只獨勝山として金と急ぎ行く地勢と見るよ
 遠く金りハ舞たる金塔と山は傍と起り田野廣闊て木花若
 頃の青筵と補ふとく林鬱喬本と重く「樵者と駭し地境深



拍原 又
 小次郎
 後 乃 也
 藤 乃 也
 岡



其とるくんの便とてりしを里修り殿は都城をくわし時
 後と見まへ騎射とせしを執たる武士六七騎を連くり
 来る小治くはを勝山城中のするん幸又又の飛着と見聞しと
 傍の本意は不彼武士の来るを待るあまをく一揖し小生のを
 圍のまのよて南西の法泉寺春味典膳殿へ為系し不知案内は
 以て預く其居を中教下るべしと告ぐまへ首はをしするを
 止め好便宜の爲るるり後より善三騎の士を我々春味典膳殿を
 令息九段右清門にり方へと轡とひく度しく小治く大又喜ひぬ
 右乗つるあまをんとす九段右清門くくや刃るより前後と見
 見別る少年の赤父と為り必是子細何ん初静と因治より後

けりん其の便はよはぬあれよとまは二揖し其西をみるを
 降りしと刃く九段右清門より先下る初少の村より小幡が
 家又春味とる小次郎はあや小次郎面を揚てるりと言ふ九
 段右の小治くも多と多く赤こそ汝が兄小次郎るり一別以赤
 者と降りて直しく怡の情と懐く今日斗らばも相なるり何の
 喜ひう之又振んと云々まま小治く者中くは梓も如く只當懐四
 の涙は叫びぬ九段右清門の重く若く者令身國はあままま
 子細をあまも亦豫令身の来るを知ら途中事を法平のり
 便るは先赤ははひ赤まよと自馬の口を執り野徑は分入一箇
 の庵室はありてると樹間は繁すく庵中を何の先生をせり
 やし庵一人の事をもとせく先生はあより外は出移りて小生は

田舎と化移つり九良右衛門のたけなはせぬと頼むと小次郎と
 共々端の一室に入更又一別の離情と本々令弟を頼むと頼むと
 初静波方より急遽と返く疾苦あり南地の父母等懐胎し事
 大方より今もゆきつる八門前より返ぬし時宜くよきふ付は
 す木しやまも教命有り故に居身へ伴ひてく候はば人儀
 たり令弟も父の子をまじく暗討理へ疾へある返し何の子細有りて
 う義父母の忠告を辞せし小次郎も肩と低思身固義父の家より
 生涯と終るるを素志といふ又近來血縁の身出産はけき渠と圖て
 家と繼るの事なきは且信使の子身と大なる恥辱とて背懐
 敵するよ由なく扱こそせぬと頼むと油圓はけりりは父は血と毒を
 父母といはれと告ゆはせ積と懸移り涙と流して一筋始終と活る

九良右衛門精略一思惟 令弟の志操固勇士の氣ありて
 為方のそよあつりと名素義肅家君の口ま似ともふんを以て
 目守に令弟の可為大に理なき人々の窮乏は自ら稟の故にむ
 るを又有り故にたとあるその老母をこの苗貴を養ひ去らざる
 の貧賤を厭はば居而の信は康して其商賈の職を以て令弟の
 地姓を冒し信使の下にまは父の命をふるまは令弟は形て身と
 辱しめ先と汚しの様ひりし然し是は又もて思ふ所の能ざるはか
 吐血等の候と頼むと血縁の身は家と遠くする八個人情の中
 死を知りしものも人の子にしては義母の心をなほと考へず
 自給止むとるざるの村宜くは養父も思ふ通と信し父の心も肯
 げ付理はも戻るるもなきこと何れもよき素直は家と通じしり

多足翁 邦好 遇

圖



繪本 源氏物語 卷三



繪本 源氏物語 卷三

四

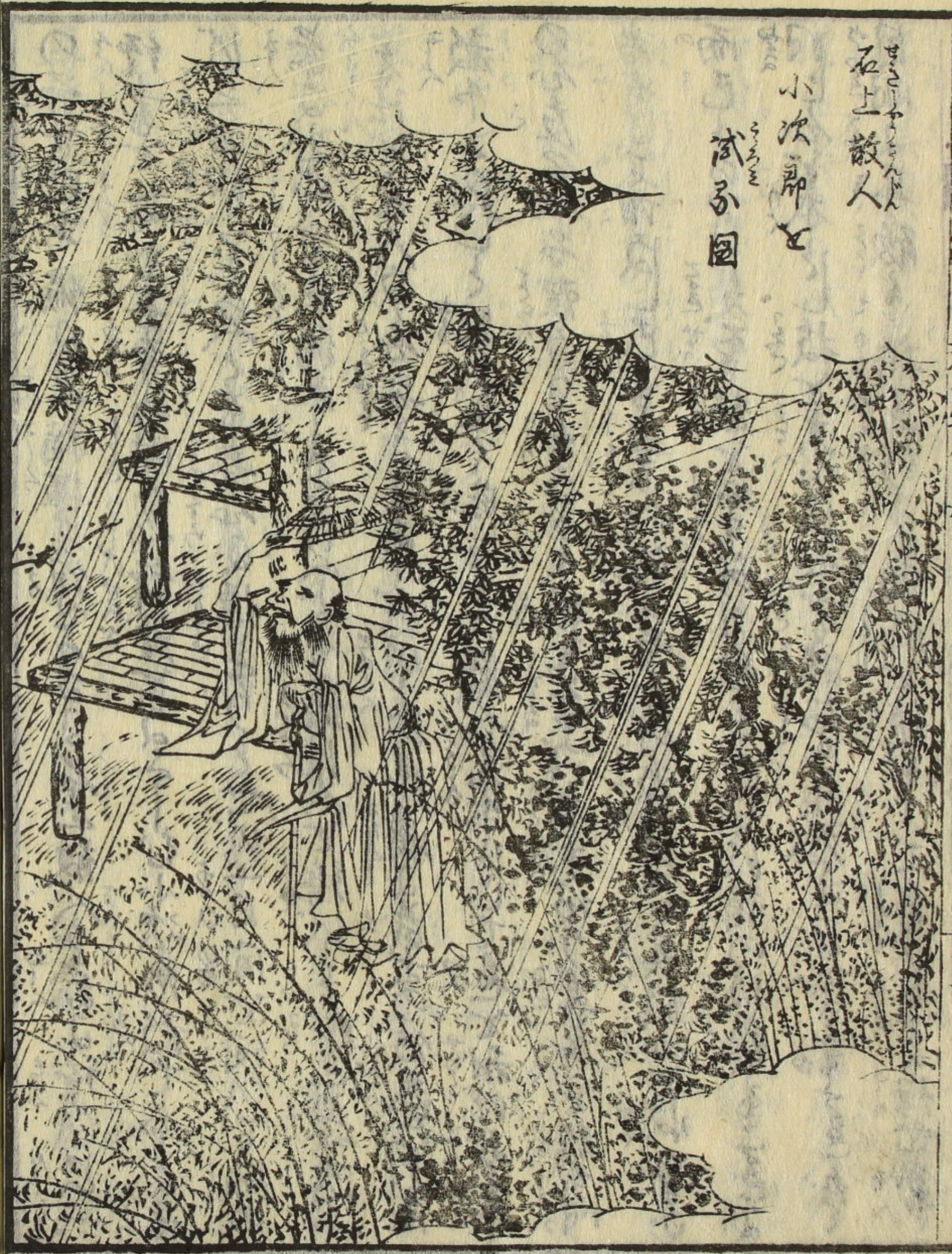
結ばしとてうづは是等の子細あまごひ今父の娘と解事交
 走く果さぬよ西よあはび人誰う過るうん波や弱年の金骨は
 てとやれく不後び故ははゆ無父の罪と傳て後來の恩徳と金骨と
 抱し是義父母のそるうは家父母も孝たせざる可なりとこそを
 是して諫うぞ小次房も理は法し賢く黙然として居たりるる
 席と心は父兄の汚穢を承り前非と悟り今更後悔仕りぬるる
 ら一旦適逢せざるを母父母の家人故るるは油の面皮の骨てを之
 彼合汚穢とせざるも化約は移りて志を立其うよて汚穢を押し
 上ん自然は道徳として四とざるのゆるるを今日の對教今世乃所
 曉とてこそ存り人汚穢を承りてし中がてまりそるうはと忍び
 存と般てはるるは九段右兼のし思ひは涙と回意誓附とぞ

移るる且是遠處室の主人と云ふ故一諸侯の世居はして能徳
 又練進し重職を任たりしが故有りて家と合弟は後世を忍び
 自らの上教人と解し心と方外は遊しうたは法園と遊習し
 水の系勝の里の風俗其意は極よるるは幽るる棲とわく是と
 及び厭ハ親族と去て又是方は移りて由縁は羈せざる強よの
 走く其齡古稀は世しとてくも矍鑠たるるは壯年の正しとて其
 地は遇く深く池と原はと人自を徳と知く後ハ執已が極よ
 疑いと正し解し事その教人よ及び去去城九段右兼のし其
 付内教人外よりゆきり二人の体と刃く九段右兼のし其
 九段右兼の志を教礼と正し小治うと掲せるの次第と告るる
 教人よ其志して是下仕奉るるは一人は二國は方理と説く却て物

石上散人

小次郎

武家圖



馬の中へ並馳する人も五人の境を分るべし只一掃無探探乃
 技と事とすまが平居ありて人の耳目を驚かす人もも
 隙へぐ精効一を技するものよ、突るる事良し汝武技と修せんと
 先教をせぬじもた他は「事」を執時老公と其をよるも、敢て外は
 扱バ用暇するの時、南へ端座して難を妄念と絶ち心氣
 丹田に在し、あぢふ又切まを情らば、切して歳月と積るる老は
 活潑の地は、何くも切居坐師の老より流離精沛の老より、
 能一の所在と、其時又及ぶ一級法を、其の技と、さうと、
 竹の弊ありて、地又教十年の秘は、又勝るべし千里は、
 抱むは、水氷と、過瀾と、せご、精養又之と、勉よ小治、
 又且、切と、凝は、ゆ一、年、修、て、又、あ、り、く、心、裡、の、精、的、る、る、ゆ、大、の、旧、日、

よ、突、り、し、る、散、人、機、と、察、し、切、の、あ、り、ん、時、耳、を、り、と、ぬ、け、う、降、り
 る、目、小、雀、軒、端、は、匿、ま、巷、の、大、竹、麻、の、下、又、附、く、昔、は、毛、羽、の、傷、
 と、破、居、る、と、せ、ん、く、小、治、身、又、杖、を、扱、步、彼、雀、と、驚、か、し、と、令、小、治、
 高、き、う、又、後、して、何、ひ、高、僅、は、杖、を、揮、り、ん、と、す、ま、が、雀、早、く、羽、た、
 走、り、飛、き、り、ぬ、せ、ん、人、又、大、と、指、小、治、を、冬、又、ま、さ、が、ひ、す、る、く、と、竹、麻、
 の、下、へ、歩、寄、る、を、固、く、附、る、か、の、ま、向、と、強、く、驚、か、ま、さ、バ、太、痛、く、お、ま、
 て、大、又、驚、き、と、悔、を、斬、り、又、哀、を、と、殺、して、遠、く、走、り、り、ぬ、け、時、敵、人、
 小、治、身、を、形、と、凡、物、の、取、大、小、あ、ま、バ、智、も、亦、大、小、何、り、人、又、と、ま、め、の、
 其、情、人、又、親、く、人、又、遠、さ、ま、の、ま、情、自、今、の、疎、く、今、か、と、雀、と、は、ま、さ、
 大、小、親、疎、大、又、相、同、し、う、え、ま、る、く、ま、雀、下、の、杖、を、扱、か、杖、の、下、の、雀、と、
 と、ま、ま、大、の、智、小、雀、は、又、ぬ、ま、が、あ、ら、ぬ、か、思、ひ、を、以、小、治、う、釋、す、る

色よく小倉先生は樹と雖く、人の家の形もよく、
 のまを懼之と守事切なる故に、一書必読之を著す大の巻又懼く
 先生を以て竹麻と稱し、小生と主人とをり、故に書く事をもよふん
 及し是を以て一過一の擧る方、智者のなるは、
 情るもの意よりして、其の又も、
 尔と多の汝に理を弁へ、
 情又技の末と、
 及し被小倉又初は、
 及しと傳へ、
 と暢の朋と、
 年の月日とを、
 繪本考感傳卷之二年

小學入門兩點附	榎本長郎編輯	全一冊	此書小學校のそと、めいふ教の小學入門ふかふかと附け小兒ふとよりやそとせし書あり
小學讀本字引	橋本小六訓点	全一冊	明治五年八月整 日本地誌略字引 名和喜七訓点 全一冊
日本略史字引	藤田善平訓点	全一冊	萬國地誌略字引 鉄田登羅太訓点 全一冊
日本地理小誌字引	鷹嘴房吉訓点	全一冊	萬國史略字引 右同人訓点 全一冊
洋算學之め	森先生著	全一冊	小學化學書字引 鷹嘴房吉訓点 全一冊
地球儀用法問答	村上復雄著	全一冊	面引人體問答 松川半山著 全一冊
筆算試験問答	米田谷ノリス氏著 皇國即上復雄譯	全一冊	此書西曆一千八百七十年米國ミツセル氏著アリイゴロ イタリヤト同年八百五十八年全圖コレ氏著ワラストス アガカライト二書ヲ抄訳シタル大珍書ナリ 此書原本ハ泰西有名算術家タラス氏ノ撰著ニ シテ洋算ヲ學ぶニ必ス欠クベカラズル書ナリ

